

日本人の世界観と日本語

小野良美

はじめに

言語と文化 (culture), あるいは言語と人間の知覚 (perception) や思考 (thought) との関係について, 哲学や言語学, そして心理学などの分野において, これまでに多くの研究がなされてきた。それらの中でもよく知られているものに, 人の思考や知覚などはその人が話す言葉に大きく影響される, すなわち英語を母国語とする人と日本語を母国語とする人は知覚や思考のパターンなどが異なるという考えがあり, この論の代表的な提唱者の名前から“サビア・ウォーフの仮説”と呼ばれる。この論の真偽については, いまだ議論的となるところであり, その詳細について議論し真偽を問うことは本論の目的ではない。しかし, 言語が我々の思考や情報を伝達するための手段であり, それらの思考や情報をコード化したものであるならば, 言語の形が話者の知覚や思考を反映しているのは自然であると考えられる立場から, 本論では日本語の特徴といわれる幾つかの言語現象について, それらが日本人の世界観, 自然観, 価値観をどのように反映しているかを述べてみたい。その際, 英語が西洋人の世界観, 自然観, 価値観をどのように反映しているかとの比較において論ずることは一つの有用な手段であると考えられる。まず始めに, 日本人の世界観について述べ, 後に日本語の特徴について述べることにする。

1. 日本人の世界観

日本人の世界観は, 人と自然とのかかわり方や自己と他者とのかかわり方において, 西洋人の世界観と対照をなし特徴づけられる。自然とのかか

わりにおいては、西洋人が伝統的に自然と対立し、自然を克服していこうとしてきたのに対し、日本人は自らを自然の一部であると考え、これに融和しようとしてきたとすることができる。また他者とのかかわりにおいては、西洋人はひとりひとりを独立した意志をもった存在としてとらえ、個人が重んじられるのに対し、日本人はひとりひとりを集団の構成員であるとしてとらえ、個人の意志よりも集団の調和が重んじられるとすることができる。

1.1. 日本人の自然観

西洋人の自然観と日本人の自然観との違いを論ずるものは数多くあるが、ここでは源(1985)の論をとりあげてみたいと思う。源は、自然を人間とのかかわりに従って三つに分類している。一つめは“外なる自然”であり、科学的認識や美の対象となるような物理的側面としての自然である。二つめは“内なる自然”であり、人間の内面的な性質としての自然である。そして三つめは“宗教的・形而上的自然”，すなわち“外なる自然”や“内なる自然”を統一する絶対的な存在としての自然である⁽¹⁾。源によると、西洋の自然観においてはこれらの三つの自然がそれぞれ独立したものととらえられ、それぞれの間にははっきりとした区別が認められる。一方、日本ではこれらがはっきりと区別されず、そこに連続した統一性を形成している。言い換えれば、人間は自分を取り巻く物理的な自然に対しても、それら一切をコントロールする絶対的な自然に対しても、別々な存在として対面するのが西洋の自然観であり、人間が自らを物理的自然や絶対的自然との連続性の中に位置するものととらえるのが、日本の自然観なのである。そこには、厳しい自然と戦いながら、自然を克服することによって文明を築いてきた歴史と、比較的穏やかな気候に恵まれ、自然を愛でながら生活してきた歴史との違いが現れている。これを象徴しているものの例としてよくとりあげられるのが庭園の造りである。西洋の庭園は、木や花が様々な模様を描いて整然と並べられており、いかにも人間の自然に対するコントロールが現れているものが多いのに対して、日本の庭園は木や石が

一見無造作に、自然の姿が残るような様子に並べられているものが多く、そこには自然に対する人間の支配の影は薄い。

1.2. 日本人の価値観

ルース・ベネディクト(1967)は、西洋の文化は“罪”の文化であるのに対し、日本の文化は“恥”の文化であると述べて、それぞれの文化の背後にある価値観の違いを指摘した⁽²⁾。これによると西洋の善悪の価値観はユダヤ・キリスト教の神のような絶対的な価値基準に基づいており、欧米人はその基準に反することを“罪”として意識するが、日本人の善悪の価値基準は相対的なもので、自分の言動を他者がどう判断するかに基づいており、他者に受け入れられないものを“恥”として意識するというのである。また、欧米人の価値観と日本人の価値観との違いについて、欧米は“個人主義”の社会であるのに対して、日本は“集団主義”の社会であるという事もしばしば指摘されるところである。欧米では、個人が自分の考えに従って言動を行なうことが尊重されるのに対し、日本では、“出る杭は打たれる”ということわざが表すように、個人が自分の考えに従って集団と異なる言動を行なう事を嫌い、個を殺しても集団と歩調を合わせる事が好ましいとされるのである。これは先ほど述べたそれぞれの自然観に通ずるところがあり、人間が自然と対立し、これに主体的に対応していく世界と、人間が自然と調和し、そこに溶け込んでいく世界との相違から生まれてきた価値観の相違であると言えるかもしれない。

2. 日本語の特徴

日本語の特徴としてあげられるものの多くは、上に述べた日本人の世界観を反映していると思われる。以下、日本語の特徴を述べてみる。

2.1. “なる”の言語

日本人は人生の中で、また日常生活の中で経験する様々なことを、自分がいろいろなことを“行なっていく”というよりも、自分の周りでいろいろ

るな出来事が“起こっていく”という言い方を好む。人生の中で大きな決断を必要とするような事にさえ、自分で選んだと言うより、事件が自分にふりかかったというニュアンスの表現を用いることが多い。例えば、“私、この度結婚いたします”よりは、“私この度、結婚することになりました”のほうがより一般的であり、“仕事を得ました”や“就職を決めました”より、“就職が決まりました”という言い方がより多くなされる。何か自分の意志の及ばぬところで物事が決まり、その出来事の中にたまたま自分が居合わせるといった事を感じさせる表現が好まれるのである。この点について池上(1981)は、英語のように、“主体が何かを行なう”という表現が多く用いられる言語を“する”的な言語と呼び、日本語のように、“出来事が起こる”という表現が多く用いられる言語を“なる”的な言語と呼んでいる⁽³⁾。これと呼応して丸山(1985)は、西洋の文化は基本的に“する”の文化であり、日本は“ある”の文化であると述べている⁽⁴⁾。日本では、何を“する”かよりもいかに“ある”かによって人の価値が量られると言うのである。日本人は、行動を起こしていく個人的な主体として自らをとらえるのではなく、周囲との調和を図りながら自然のいとなみの一部として自らをとらえる傾向が強いという世界観が、ここに反映されていると言うことができよう。

2.2. 擬声語・擬態語

日本語は擬声語・擬態語が非常に多い言語として知られている。様々な物事の動作や状態、変化の様子などを、英語では形容詞や副詞など、人造の語を用いて表現することが圧倒的に多いが、日本人はその時に発する音に似た音声や、その様子を連想させるような音声表現、すなわち擬声語・擬態語を用いて表現することを好む。これは、物事をわざわざ人間が作り出した恣意的なコードに置き換えて表そうとするのではなく、それらを“ありのまま”に、自然の状態のまま表現しようとする現れである。ここにも自然との調和を重んじる日本人の自然観が反映されていると言うことができる。

2.3. 呼 称

もうひとつの日本語の特徴として、自分や他人の呼び方が挙げられる。印欧系の言語は、一人称、二人称、三人称など、人称がはっきり区別されており、例えば英語を話す人々は、聞き手が誰であろうと、話者本人に対しては一人称、聞き手に対しては二人称、第三者に対しては三人称の代名詞を用いるが、日本語においては、これが一定ではない。例えば、“ボク”というのは一人称の代名詞として用いられるのが普通であるが、幼い男の子に名前を尋ねる場合、“あなたの名前は何て言うの”と言うよりも、“ボクの名前は何て言うの”と言った方が自然に感じる。ここでは聞き手にたいして二人称の代名詞を用いるよりも一人称代名詞を用いるほうが自然なのである。また、同じ人物が自分自身を指す呼称は、聞き手が誰であるかによって様々に変化する。ある既婚の男性の教師は、自分のことをさして、生徒に対しては“先生は……”と言い、子供に対しては“パパは……”と言う。また妻に対しては“ボクは……”と言い、学生時代の親友に対しては、“俺は……”と言う⁽⁵⁾。この点に関して加藤(1975)も日本語の文は、話し手と聞き手との関係が決定されるその場の状況と密接に関係している、と述べている⁽⁶⁾。英語の場合は、聞き手が目上でも年下でも、初対面でも親しい仲でも、自分は“I”，相手は“you”である。このことの根底にあるのは、やはり西洋の絶対的、客観的基準と個の関係に基づく価値観と、日本の相対的、他者本位的基準に基づく価値観との相違である。

2.4. 否定の疑問文への応答

同様のことが、否定の疑問文への応答の仕方についても言える。英語では例えば、“Didn't you go ?”という質問に対して“Yes”と答えれば、“行った”という意味であるが、日本語では“行かなかったの?”に対して“はい”と答えれば“行かなかった”という意味である。英語の論理は、肯定の質問であろうと否定の質問であろうと、客観的な事実に基づいて、行ったという事実があるなら“Yes”であるし、無いなら“No”である。日本語では、相手の言った事に基づいて、“はい”は、相手の言った

事を肯定する、すなわち“あなたの言った事（私は行かなかったという事）は本当です”という意味であり、“いいえ”は、相手の言った事の否定、すなわち“あなたの言った事（私が行かなかったという事）は違います”という意味である。

2.5. 敬語

日本語はまた、非常に敬語の体系が確立している言語として知られている。ここでは詳細について述べるのは避けるが、これも話し相手に合わせて言語形式を変えてゆくシステムであり、相対的、他者本位的価値観の現れであると言って良い。

2.6. 自動詞の受動態

先に日本人は、物事を自分が何かを“する”ととらえるよりも、出来事が自分に“起こる”ととらえる傾向が強いと述べた。このことを反映している日本語の特徴のひとつとして、“被害の受動態 (adversitive passive)”と呼ばれるものがある。これは本来自動詞として用いられる動詞が“～られる (-are-)”など、受動態の形をとるもので、登場者が被害を被ったことを表す事が多いことからこの名で呼ばれている。例えば、“彼は若くして妻に死なれた”、“昨日は雨に降られた”などがこれに当たり、これらの直訳にあたる構文は英語には無い。これらも、一般的な受動態のように、“動作”を受ける、すなわち“死ぬ”や“降る”という行為(?)を受けると解釈するより、ある“出来事”が起こり、その“出来事”に影響を受けた、つまり“妻が死ぬ”“雨が降る”という出来事が身にふりかかったことを表したものと解釈したほうがよさそうだ。

2.7. 主語の問題

日本語の主語の問題はこれまでに様々な議論をひき起こしてきたが、それは日本語においては主語の定義や選別が困難であることに起因する。英語では、語順や代名詞の格、動詞との呼応関係などから主語の定義や選別

が比較的容易であり、主語である名詞句は必要不可決であることの割合や、動詞のコントロールなど、統語的にも他の名詞句と比較して重要な役割を果たす。ところが日本語には、英語の主語に相当する名詞句のように、他の名詞句と比較して特別に重要な働きをしたり、ほぼ決まって同じ位置にあったりおなじ格助詞を伴ったりする名詞句を定義したり選別したりするのが非常に困難なのである。英語は語順の定まった言語として知られており、“Mary hit John”と“John hit Mary”の例のように語順を逆転すると意味も逆転してしまうため、“主語は文頭に現れる、あるいは目的語に先行する”と定義することができるのに対し、日本語は比較的語順のゆるやかな言語であり、“太郎が次郎をぶった”と言っても“次郎を太郎がぶった”と言っても意味が逆転することがないので、語順から主語を定義・選別することはできない。また、“英語の主語は、代名詞のとき必ず主格をとる”と定義することができるが、日本語で“格”を示す助詞には、格助詞の他に、いわゆる係助詞などがあり、非常に複雑である。格助詞“一が”を伴う名詞句が主語であるとする説もあるが、“彼は医者だ”のように“一が”の登場しない文もあるし、“私はビールが好きです”のように、他に主語らしい名詞句がある上、英訳すると目的語に当たる名詞句に“一が”伴われていたりする例も多く存在するため、万人の納得を得られない。久野（1973）はこれを目的格の“が”と分類しているし⁽⁷⁾、時枝（1941）はこれを“対象語”と呼んで、いずれも主語とはみなしていない⁽⁸⁾。更に英語では、“BE 動詞”の単数複数⁽⁹⁾の区別や、現代英語にはひとつしか残っていないが、いわゆる“三単現の-s”など、動詞は主語によってコントロールされるが、他の名詞句とは呼応しない。動作や状態と主語との間には特別な関係が存在するのである。一方日本語の動詞とこのような呼応関係にある名詞句は表面的には存在しない⁽⁹⁾。この点について田中（1960）は興味深い観察をしている。日本語の文に登場する名詞句は、すべて同じ重さで動詞にかかっており、英語の主語のようにある名詞句だけが動詞と特別にかかわることはない⁽¹⁰⁾と述べているのである。この、主語と動詞が特別な関係をもつ英語と、すべての名詞句が同じように動詞に

かかっている日本語の相違は、それぞれ自然と主体的にかかわってコントロールしようとする自然観と、自然の一部として全体と調和しようとする自然観を反映していると言うことができるだろう。

おわりに

温暖な気候と豊かな自然に恵まれた日本では、人間が自らを自然の一部であるにとらえ、自然との調和を重んずる自然観がうまれた。同様に他者とのかかわりにおいても、ひとりひとは集団の一部であり、個人の意志よりは集団との調和を重んずる価値観がうまれた。これらの日本人の世界観はその言語に反映され、日本語を特徴づけている。言語はその話者たちの文化や思考、知覚などを映し出す鏡であると言えるのではないだろうか。

注

1. 源 p. 349
2. ベネディクト 第10章
3. 池上 p. 281
4. 丸山 p. 158
5. 鈴木 pp. 183-6
6. 加藤 p. 13
7. 久野 第4章
8. 時枝 p. 374
9. 柴谷 (第4章) は、第2次文法範疇という操作により日本語の主語の定義は可能であるとしている。
10. 三上 pp. 76-80

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』— 言語と文化のタイポロジーへの試論 — 大修館書店
- 加藤周一 (1980) 『日本文学史序説』 筑摩書房
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館書店

-
- 鈴木孝夫 (1975) 『閉ざされた言語・日本語の世界』 新潮選書
時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
R. ベネディクト (1972) 『菊と刀』 日本文化の型 (長谷川松治 訳) 社会思想社
丸山真男 (1985) 『日本の思想』 岩波書店
三上 章 (1972) 『現代語法序説』 — シンタクスの試み — くろしお出版
源 了園 (1985) 「日本人の自然観」 (『新岩波講座 哲学 5 自然とコスモス』) 岩波書店

Benedict, Ruth. (1967) *The Chrysanthemum and the Sord.* Boston : Houghton Mifflin Co.

Inoue, Kyoko (1979) "Japanese : A Story of Language and People." In *Language and Their Speakers*, ed. Timothy Shopen. Cambridge : Winthrop Publishers, Inc.